

平家物語八坂流甲類百二十句本再説

高橋 貞一

百二十句本については、昭和四十八年十月、思文閣より翻印出版したので、その時に解説を加へた。しかし十分とはいへないので、少し補説したいと思ひ、再説として述べようと思ふ。

百二十句は、巻々の章段を十章にわけて各巻十句づつとして百二十句としたもので、他に例のない章段の方法である。又その章段の名目も、例へば、巻一をあげると、一句、てんじやうやみうち

じよ

たゞもりしうでん

たゞもりすゑなかいゑなり五せつのまひ

たゞのりのは、の事

といふやうに、題目に小題目を附した体制である。他の八坂流甲類本である鎌倉本（彰考館本）と、少し比較す

ると、

○鎌倉本

忠盛昇殿事

平家一門繁昌事

清盛出家事

白拍子義王仏等事

二代近衛院二条院后立事

二条院崩御事

○百二十句本

てん上のやみうち

さんだい上ろく

二だいきさき

がくうちろん

ぎわう

ぎわうしゆつけ

とあつて、直接に関係はないといへよう。十二巻全部にわたつて同様な目録をしたのは、全巻にわたつての作為であることを注目したい。以下巻々について検討してゆく。

○平家第一

てんじやうやみうち

ひたちの大ぜう、くにか(覚一本なし)

たゞもりいまたびせんのかみ(覚一本なし)

はりまのくに(覚、たじまのくに)

そねみいきどほり(覚一本なし)

したにさし(覚一本したにしとげなげにさし)

よそよりはこほり(覚一本なし)などやうに見えた

り

とくさいろのかりぎぬ(覚、うすあをのかりぎぬ)

いへさだかしこまつて(覚、家貞申しけるは)

つたへうけたまはつて(覚、承候あひだ)

いせへいじとぞはやされける(覚、申ける)

御まへをまかりいでられけるが(覚一本なし)

見給ふまへにて(覚、見られける所にて)

よこたへさしたりけるかたなを(覚、なし)

つらたましゐにてあるあひだ(覚、なし)

以上の如く小さな差がかなりあるが、これは百二十句本の本文の性格を明示する重要な差である。語りによる

差であらう。

次に殊に注目すべき異文をあげて検討したい。覚一本、

鱧の条、熊野権現の利生、白魚の事がある。他の八坂流本の鎌倉本、屋代本、平松家本等なし。本書は大略覚一本に似るが少し異なる所がある。

せんだち申けるは、むかしのしうのおわうのおねに
こぞ、はくぎよはおどりいりて候へしか、これをば
まいるべしと申され、さしものしやうじんけつさい
のみちなれども、みづからちやうみして、わが身く
ひ、いへのこらうどうにもくはせられるゆへにや、
しそん(の)くはんとも……

とある。覚一本には、白魚の事は清盛の言である。これは覚一本より後の一方流流布本に似た文である。よつて百二十句本の成立が覚一本より後の改訂本によつたものか。

覚一本の吾身栄花の条、

じんき五年、このゑの大しやうをはじめおかれてよ
り、このかた、きやうだいさうにあひならぶ事……
とあり、覚一本に類する。他の佐々木本、屋代本には、

天平二年庚午ノ年朝家ニ近衛大将ヲ始テ置ル、参議
民部卿藤原房前ヲ以テ……

長い異文がある。清盛の娘について、

一人は六でうのせつしやうどの、きたのまんどこ

ろにならせ給ふ

とある。覚一本には、

一人は六条摂政殿の北政所にならせ給ふ、高倉院の御在位の時、御母代とて准三後の宣旨をかうぶり、

白河殿とておもき人にてましましけり

とある。脱文であらう。

次に二代の後の事(覚一本)がある。公卿意見の条に、

そくてんくはうごうは、たうのたいそうのきさき、かうそうくはうていのけいばなり、たいさうほうぎ

よの、ち、くはうぐうあまになりて……

とあつて、則天皇后の詳しい事がある。他の八坂流本

(鎌倉本、屋代本)にもあり、八坂流甲類本の特徴である。

次に額打論、清水寺炎上、東宮立の事があつて、第五句ぎわう、第六句ぎわうのしゆつけとある。

覚一本と略同文であるが、仏御前の舞の条に、

きみがよをも、いろといふうぐひすの、こゑのひ、きぞはるめきにける

とうたひて、ふみめぐりければ

とある。鎌倉本に同じ。祇王の清盛の邸に赴く条、

なみだのひまよりも、

露の身のわかれしあきにしえはてで、又ことのはに

かゝるつらさよ

とある。この和歌も鎌倉本に同じ。今様歌も、

月もかたぶき夜もふけて、心のおくをたづぬれば、ほとけもむかしはほんぶなり、われらもつゐにはほとけなり、いづれもぶつしやうぐせる身をへだつる

のみこそかなしけれ

とある。傍線を付した所は覚一本なく、鎌倉本に同じ。

その他は大略覚一本に同文である。

○平家巻第二

十一句、めいうんざするざい

最後に、

まんざんの大しゆ、のこりとゞまるものなく、ひがしさかもとへおりくだり十ぜんじの御まへにて、せんぎしけるは、そもくあはづのほとりにゆきむかつてくわんじゆをうばひとゞむべきなり、たゞしわれらさんわう大しの御ちからのほか又たのむかたなし。

とある。覚一本と差があり、又覚一本の本文、

但し追立の鬱使領送使有なれば、事故なく執得奉ら

ん事有難し

の文なし。脱落か。傍線を付した所は、一方流流布本の文と類する。よつて、覚一本の本文の脱落と流布本の如き文とが合して複雑な文である。

十三句、たゞのくらんどかへりちう

覚一本の西光被斬の条、

ざんしんくにをみだすとは、かやうの事をや申らん
大しゆわうちにはらまれてさのみせうめいをたいか
んせむもをそれなり。

脱文がある。

この様な脱文(脱語)をaとし、増補をbとして数え
以て本文の性格を示すこととしたが、aは少く、bが多
いので中止したことがある。

覚一本の小教訓の条、

しん大なごん、一まなる所にをしこめられこれ△はひ
ごろのあらまし事のもれきこえたるにこそ……あ
んじつゝけておはしけるところに、うちのかたよりあ
しおとたからかにふみならしつゝ、大なごんのうし
ろのしやうじ、さつとあけられたり、入道しやうこ
く、もつてのほかにいかれるきしよくにて、そけん
のころものみじかやかなるに、しろき大ぐちふみ
く、み、ひじりつかのかたなまへだれにさしはらし、

しばらくにらまへてたゝれたり

とある。覚一本とも差があり、又傍線を付した所は、鎌倉本に類する語である。

以後の文も覚一本とはかなりの差がある。最後を示せば、

あそびたはぶれまひをどり、よをよともおもひ給はずこそ、
△きのふまではありしに、夜のまにかはるありさまは、
せいじやひつめつのことはりは、めのまへにこそあらはれ
けれ、……

とある。覚一本の文の脱落がある。

聖徳太子の十七条の憲法の条、

十六句大けうくん

心をのくおもむきあり、かれをぜとし、われをひとし、
われをぜとし、かれをひとす、ぜひのことわりたれかよく
さだむべき、あひともにけんぐなり、たまきはしなきが
ごとし……此事すであらはれ候ぬ、そのうへ大なご
んをかくをかれ候うへば、たとひ君いかなる事をおほし
めしたつとも、なにのをそれが候べき、そのうへしや
たうのざいくはをおこなはれ候うへは、いまはしりぞい
て事のよしを申させ給はゞ、……

しんたいこ、にきはまれり、ぜひいかにもわきまへがたし、こゝにらうしの御ことばこそおもひしられて候へ、こうなりなとけて身しりぞけ、くらゐをさげざるときんば、そのがいにあふといへり、かのしうかは、大こうかたへにこえたるにて……

とある。以後も覚一本に増補した語が多く見られる。

十七句、なりちかるざいせうしやうるざい
御物したて、まいらせたれども、御らんじもいれず、
見まはし給へば、せんごにつはものみちくたり、
わがたがさまのものは一人もなし。やがて車をよせて、とくくと申せば、

大なごん心ならずのり給ふ、たゞ身にそふものとは、つきせぬなみだばかりなり、しゆじやかをみなみへゆけば、おほうち山をもいまはよそにぞ見給ひける……たとひぢうくはをかうぶつて、をんごくへゆくものも、人一兩人はそへぬやうやあると、くるまのうちにてかきくどきなき給へば、ちかく候ふしども、みなよろひのそでをぞぬらしける。

覚一本と叙述の前後差異は、琵琶法師の語り方の相違によつてであらう。佐々木本（天理図書館蔵）と略同文である。次は覚一本の阿古屋松の条である。流罪の人々

の配所は、

覚一本（流布本）	鎌倉本	百二十句本
近江中将入道蓮浄	佐渡国	筑前国
山城守基兼	伯耆国	ちくぜんの国
式部大輔正綱	播磨国	いづもの国
宗判官信房	阿波国	おきの国
新平判官資行	美作国	さどの国
	美作国	みまさかの国

覚一本より鎌倉本、百二十句本と変化したものと認められよう。

以下大略覚一本に同じ。しかし増補の語がかなりある。十八句、さかいがしまそとばなかし

俊寛、康頼、成経三人、鬼界が島に流されて、鬼界が島の有様を述べた後に、覚一本の康頼出家の記事が来る。かるがゆへに、いわうがしまとぞ申ける、されどもたんばのせうしやうのしうと、平さいしやうのしやりやう、ひぜんの国かせのしやうより、いしよくをつねにをくられければ、しゆんくわんもやすよりも、いのちいきてすごしけり、やすよりは、ながされけるとき、すはうのむろとみといふところにてしゆつ

けしてんければ、ほうみやうしやうしうとぞなのり
ける……（歌あり）

鎌倉本と同文といへよう。

覚一本の叙述の順序

阿古屋の松

俊寛以下三人鬼界ヶ島流罪

信俊下向

成親死去

徳大寺沙汰

堂衆合戦

山門滅亡

善光寺炎上

康頼出家

康頼祝言

卒都婆流

蘇武

堂衆合戦、山門滅亡、善光寺炎上が相違の中心である。
鎌倉本は康頼出家の次に、信俊下向、成親死去、康頼祝
言の順序である。百二十句本は康頼祝言の章の前文など

は覚一本と全く同一の文である。

龍女出現（よろづのほとけのぐはんよりも、今様）

祝言

の順序で覚一本と異なる。鎌倉本も同じ。しかし鎌倉本
は龍女出現は簡略で今様歌なし。

康頼祝言、

覚一本に比して少し差がある。

いち／＼のこんしをなうじゆせしめ給へ、しかれば
すなはちなりつね、しやうしう、ゑんたうはいるの
くるしみをしのぎ、きやうじやうくはらくのこきや
うにつけしめ給へ、まさにうむまうじうをあらため、
むゐのしんりをよむべし、しかるときは、むすぶは
やたまのりやうしよはずいきし、あるひは、うゑん
のしゆじやうをみちびき、又みだりにむゑんのぐん
るいをすくはんがため、……

とある。覚一本は

一々の懇志を納受し給へ、然れば則ち結早早玉の両
所権現、各機に随て、有縁の衆生を導き、無縁の群
類を救はんがために

とある。

次に、

あるときおきよりふきくる風の、せうしやうやすより二人がそでにこのは一ツづつふきかけたり、これをとりに見れば、たのみをかくる御くまの、なぎのはにてぞありける、むしくひあり、

ちはやぶるかみにいのりのしげければなどか都へかへらざるべき

かへすぐもめでたかりける事どもなり

覚一本と差あり。鎌倉本に類する。

次に卒都姿流二首の事がある。

なぎさにうちあげたり、此みやうじんと申は、しやかつらりうわうのだい三のひめみや、たいぞうかいのすいじやくにてまします、しゆじん天わうの御うに、此しまに御やうがうありしよりこのかた、さいどりしやう、いまにいたるまで、じんくきどくの事どもなり、さればにや、八しやの御てんいらかをならべ……

とあり、覚一本と差あり、鎌倉本に類する。又覚一本は修行僧の事が先に出て、厳島大明神の事が後に述べられて順序に差がある。

次に蘇武の事がある。

むかしかんわうここくをせめ給ふに、三十まんきの

せいをもつてすといへども、ここのいくさこはくして、かんわうのいくさをつかへさる、その、ち五十まんきのせいをもつてせめらる、なをもこ、くのいくさこはくして、りれうといふ大将ぐんをはじめとして、千よ人とつてここのとゞめらる、その中にそぶといふしやうぐんをはじめ、むねとのもの六十人、すぐりいだして、がんくつにをつこめ、三ねんをへてとりいだしかたあしをきつてをつはなつ……

とある。鎌倉本に類する。覚一本とは大差あり。

十九句、なりちかしきよ

しん大なごんなりちかのきやうは、すこしくつろぐ心もやとおもはれけるところに、しそくたんばのせうしやういげ、きかいがしまにながされぬとき、こまつどのに申て、つゐにしゆつけし給ひけり、きたのかたは、うんりんゐんにまし／＼けるが……

覚一本とはかなりの差がある。鎌倉本は、目録の最後に

一成親卿禪門逝去事

一彗星事

とあるが、成親卿逝去事は、康頼出家事の次にあり、本書の最後に徳大寺厳島詣事がありて彗星事なし。

二十句 とく大じどのいつくしまさんけい
覚一本と差あり、鎌倉本に類する。

○平家巻第三

二十一句 ぜんほうくはんちやう

覚一本巻三の巻頭の文である。

ぢしう二年正月一日、おんの御しよには、はいらい
おこなはれて(中略)にがわらふてぞおはしける。

おなじく正月七日けいせいとうはうにいづるとも申、
おしやくきとも申、十八日ひかりをます、そのころ
ほうわう三井寺のこうけんそうじやう(を)御しは
んにて……

以下は、覚一本巻二の堂衆合戦、山門滅亡の記事にあ
たる。善光寺炎上の事はなし。以上の記事は八坂流甲類
本の特質といふべきである(鎌倉本同じ)

二十二句、大しや

覚一本に略同文。次に足摺も亦覚一本に略同じ。

二十三句、御さんのまき

これ又覚一本と略同文。

二十四句、大たうしゆり

そもく平家のいつくしまをしんじられける事はな

にといふに、とばのゐんるとき、大じやう入道、い
まだあきのかみにておはしけるが……

とある。章段の分割が適当である。本文は覚一本と略同
じ。頼豪阿闍梨の沙汰も覚一本に略同じ。

二十五句、せうしやうきらく

さるほどにことしもくれて、ちしうも三年に成にけ

り、正月下じゆんに(覚一本なし)

とあつて、増補がある。覚一本と同文といふべきである。

みやこよりのりものどもむかひにつかはしたれば、

これにのりて京へいり給ひける。

とある所は、脱字がある。

やすよりにう道は、わがさんさうのありければ、そ

れにおちつゐて、見れば、三とせがあひだにあまり

にあればたるを見て、なくくかうぞ申ける、

ふるさとのきのいたまに……(歌)

とあり、増補の語がある。この章は覚一本に殆ど同文で
ある。

二十六句 ありわうしまくだり

ありわうかめわうとて二人あり、二人ながらあけて

もくれても、しうの事をのみなげきけるが、そのお

もひのつもりにや、かめわうはほどなくしににけり、

ありわういまだありけるが、きかいがしまのる人ども、けふすでに……

亀王の事あり、鎌倉本は覚一本と同じく、注目すべき増補である。佐々木本（天理図書館蔵）にはある。次に、

しまにのこされぬときゐて、ありわうなみだにぞしづみける、なくくみやこにたちかへり、その夜は六はらのへんにたゝずみて、うかゞひき、けれども、き、いだしたる事もなし、なくくわがかたにかへりて、つくぐなげきくらせども、おもひはれたるかたもなし、かくておもへば身もくるし、きかいがしまとかやにたづねくだつて、そうづの御ばうのゆくゑをいま一ど見たてまつらばやとぞ思ひける、ひめ御ぜんのおはしけるところへまいりて申けるは、きみはこのせにもれさせ給ひて、御のほりも候はず……

とあり、覚一本とも大差がある。

もしか様の者共の中にわがしうの行ゑやしりたるものやあらんと物申さうといへば、何事と答ふ（覚一本）、本書脱す。

や、あつて、そうづすこし人こゝろいできて、たすけおこされ、の給ひけるは、さればとよ、こそ、せ

う将やすりにう道がむかひのときも、そのせに身をもなくべかりしを、よしなきせうしやうのいかにもして、みやこのをとづれをも、まてかしなどなぐさめをきしを、おろかにもしやとたのみつ、ながらへんとはせしかども、此しまには人のくひものなきところにて、身にちからのありしほどは、山にのほりていわうといふものをと……

とあり、覚一本と差あり。

いま、で御のほりも候はぬぞ、あまりに御こひしもおもひまいらせ候に、此ありわう御ともにていそぎのほらせ給へとぞかゝれたる、

たなばたのあまのつりぶねわれにかせ八えのしほぢのち、をむへん（覚一本）

とある所は、覚一本の、

あはれ高きもいやしきも、女の身ばかり心うかりける物はなし、おのこごの身にてさぶらはば、わたらせ給ふ嶋へも、なかまいらでさぶらふべき、を脱してゐる。

これを見よ、ありわうよ、此こがふみのかきやうのはかなさよ

有王の京都へ帰らるる事を、

なくくみやこへたちかへり、おやのもとへはゆか
ずして、そうづのひめ御ぜんの御もとへすぐにまい
り

とある。以上覚一本に略同文といへよう。

二十七句、こがねわたしいしもんだう

つじ風おびたゞしうふひてゆくに、むなかどひらか

どをふきたふし……(脱字あり)

じんぎくはん、おんやうのかみどもは、うらなひ申
ける、こまつのおとゞは、かやうの事どもをつたへ
き、給ひて(脱文あり)。

次に、覚一本にある無文、燈籠の事なく、金渡し(覚
一本)がある。

二十八句、こがう(目録にあるのみ)

二十九句、ほういんもんだう

ひのものをみづからかひて、べうにたて、こそかな
しみ給ひけれ、かるがゆへに、ち、よりもむつまじ
く、こよりもしたしきは、くんしんのみちなりとこ
そ申事にて候に、しげもりがちういんのうちに、八
はたへ御かうのあつて、御ゆうある、人めこそはち
いり候しか、これ一ツ、たいふずいぶん君のために
ちうこうたにことなるものなり、さればほうげんへ

いぢのかつせんにも、いのちをきみのためにかろん
じて、かばねをせんぢやうにすてんとふるまひ候し
事、ひさしからざる事なれば、きみいかでかおぼし
めしわするべき、これ二ツ、その、ち、大小どゞの
御大事にぬんぜんといひ、ちよくめいと申、ぐんち
うをぬきんづる事どゞにをよべり、しかればゑちぜ
んの国をしげもりにたまはりしときは、し、そん
ぐまでくだされ候ひしが、しげもりが中いんのあ
ひだにめしはなざる、でうざいくはなに事ぞや、こ
れ三ツ、

とあり、覚一本と大差あり。

つぎにきのふけふみなもつて此一もんをほろぼすべ
きよしはつこうあり、これ又わたくしのけいりやく
にあらざ候よし、つたへうけ給はるあひだ、せん
く(のちうきん、いまにをいてはいたづら事になり
ぬ、きやうごうさらにいぜんのぐんちうほどのちう
あるべきともぞんぜざるあひだ、くげほうこうのた
のみなし、これ五ツ、どゞのちうきんをわすれずん
ば、いかでかにう道をば、七だいまですてらるべき
それになう道すでに七じゆんにおよび、よめいいく
ばくならず、一このあひだにもや、もすれば、ほろ

はずべき御はかりごとあり、申さんやしそんあひつ
みで一日へんじもてうかにめしつかはれん事かたし、
これ六ツ、およそおひてこをうしなふはこぼくのえ
だなきがごとしとうけ給候、だいふにをくれ、うん
めいのすゑにのぞめる事おもひしり候ぬ、てんきの
おもむきあらはれたり、たとひいかなるほうこうを
いたすといふ共、ゑいりよにおうずる事あるべから
ず、これ七ツ、此うへはふちやうの世中に七十にを
よんでなにほどのたのしみさかへをごして、心ぐる
しくむやくのほうこうをいたしてもせんあるべから
ず、とてもかくても候なんとぞんぢ候(以下七ツ、
八ツ、九ツ省略)

覚一本と大差あり。以上は盛衰記卷十一に類する。

三十句、くはんばくるざい。

略覚一本に同じ(行隆の事も)。法皇の鳥羽殿御幸も略
覚一本に同じ。以下又同じ。

○平家卷第四

三十一句、いつくしま御かう

東宮袴著、東宮(安德) 踐祚、備中内侍(平松家本)
し、時忠の語等覚一本と略同文。次に新院嚴島御幸に

うつる。

はるくのにしのはて、しまぐにへわたらせ給ふ神
へしも御かうなる事は人いかにと申あへり、ある人
申けるは、白川のみんはくまのへ御かうなる、ほう
わうはひよしのやしろへ御かうなる(覚一本と差あ
り、増補)

とある。次に、

心中にふかき御ぐわんあり、御むさうのつげありと
やおほせける、いつくしまをば大じやうにう道あが
めたてまつれば、うへには平家に御どうしん、した
には……

とあり、少し差がある。

にし八でうのていへいらせ給ふ、その夜やがていつ
くしまの御じんじはじめらる、てんがよりからの御
くるま、うつしのむまなどまいらせらる、その日の
くれほどにさきのう大しやうむねもりのきやうをめ
して……

上皇鳥羽御出発の条に、

ぐぶの人々は、さきのう大しやうむねもり三でうの
大なごんさねふさ、とう大なごんさねくに、五でう
の大なごんくにつな、つちみかどのさいしやう中將

みちちか、てん上人には、たかくらの中将やすみち、
させうべんたかふさ、くないのじうむねのりとぞき
えける、まことにそうべう、やはた、かもをさしを
ひて……

とあり、供奉の人名がある。覚一本なし。鎌倉本あり
(小差あり)。その他は略覚一本と同文である。

三十二句、たかくらのみやむほん

略覚一本に同文である。熊野の別当湛増の事、覚一本
に同文、大山寺本、平松家本なし。鎌倉本なし。八坂流
の甲類本の特質か。

三十三句、のぶつらかつせん

みやは……くもまの月をゑいぜさせ給ふところに、
三ゐにう道のつかひとて、いそがしげにて、しうそ
くもちてまいりたり、……わな／＼とよみあげたり
……あらはれさせ給ひて、くはんにんどもたゞ今御
むかへにまいり候なり……をんじやうじへいらせ給
へ、にう道もこどもひきぐし、やがてまいり候はん
とぞかいたりける、みやは、こはいかにすべきとて、
とあつて、覚一本と差あり、増補された語が多い。信連
の問答の条、

にはにうちいれて申けるは、君の御むほんすでにあ

らはれさせ給ひて、くはんにんども御むかへにまい
り候と申せば、ちやうひやう衛のじう、これをきい
て、なに事にて候やらん、たうじは此御しよにては
候はずと申ければ、ではのはんぐはん、なんどうこ
れならでは、いづちへわたらせ給ふべきか、そのぎ
ならば、しもべどもまいりて御しよ中をさがしたて
まつれとぞ申ける

とある。覚一本と大差あり。

三十四句、きおう

みやは……によい山へかゝらせまします、いつなら
はせ給ふべきなれば、御あしかけそんじてはれたり、
ちあえていたはしふぞ見えさせ給ひける、しらぬ山
ちをよもすがらわけすぎさせ給へば、なつ山のしげ
みがもとのつゆけさも、さこそとこそとこころせくお
ぼしけん、……

とあり、覚一本と差あり(脱文あり、佐々木本は覚一本に
類す。)以下、覚一本と差多し。

同十六日夜に入て、源三位にう道、いゑのこらうど
うひきぐして、つがふそのせい三百き、やかたにひ
をかけて三井でらにはせまいる、わたなべのたきぐ
ちがしゆく所は六はらのうらのひがきのうちにてぞ

ありける、きおうがはせをくれてとゞまつて候よしを、う大しやうき、給ひて、あくる十七日のさうてうに、ししやをたてめされければ、きおうめしによつてまいりたり、う大しやういであひたいめんし給ひて、いかになんぢはさうでんのしう三ゐにう道のともをせずとゞまりたる、ぞんずるむねあるかとの給へば、きおうかしこまつて申けるは、ひごろはなに事候はゞ、まつさきかけてうちじにせんとこそぞんじ候つるに、こんどはなにとおもはれ候けるやらん、つゐにかうとしらせられず候、此うへはあとをたづねてゆくべきにても候はねば、かくて候とぞ申ける、としごろなんぢが此へんをいで入するをめしつかはばやとつねにおもひしに、さらばたうけにはうこういたせかし……

とある。以下覚一本と大差あり。

三十五句、てうじやう

山門牒状の次に、

まずどうしんして、をんじやうじ一みはしかるべからざるよしこしらへ給へば、みやのかたへはまいらざりせける

とあり、覚一本にはこの語なし。

三十六句、三井でら大しゆそろひ

同廿二日の夜にいりて、源三ゐにう道みやの御まへにまいり申けるは、さんもんはかたらひあはれず、なんとはいまだまいらず、ことのびてはかなふまじ、こよひ六はらへをしよせ、ようちにせんとぞんずるなり、そのぎならば、らうせう、せんよ人はあらんずらん、らうそうどもはよいがみねよりからめてにまはるべし、わかきもの共一二百人は、さきだつてしら川のざいけにひをかけて、くだりやきゆかば、京六はらのはやりおのもの共、あはやこといでくるとて、はせむかはんずらん……

とあり、覚一本と大差がある。百二十句本の後の成立を示す所である。

三十七句、はしかつせん

みやはさんもんなんともつてこそ、さりとともとおほしめされつれども、三井でらばかりにてはいかにもかなふまじとて、同廿三日のあかつきになんとへおもむかせ給ひけり、こえだときこえしかんちくの御ふえ二ツもたせ給ひけり、せみおればとばのゐんの御とき、こがねを千りやうそうちやうのみかどへたてまつらせ給ひたりければ……

とある。覚一本と差あり。

三るにう道の一るい、三井でらぼうし、つがふその
せい一千よ人、だいごぢにか、つてなんとへおもむ
き給へり、さるほどにみやは、うぢとてらとのあひ
だにて、六どまで御らくばあり、……びやうどうあ
んにいらせ給ふ、しばし御きうそくありけり、うぢ
がはにむま共ひきつけくひやし、くらぐそくをこ
しらへなんどしけるほどに 六はらにはこれをき、
てみやははやなんとへおもむき給ふなりとて、平家
の大ぜいをつかけたてまつる、大しやうぐんには、
にう道の三なん、さひやう衛のかみともり、中宮
のすけみちもり、さつまのかみたゞのり、さぶらひ
大しやうには、かづさのかみたゞきよ、太郎はうぐ
わんたゞつな、ひだのかみかげいゑ、ひだの太郎は
うぐはんかげたか、ゑつ中のぜんじもりとし、むさ
しの三郎さゑもんありくに、いとうさいとうのしか
るべきものども、われもくとす、みけり
とある。覚一本と大差あり。大矢の俊長、五智院の但馬、
など覚一本と大差あり。頼政、伊豆守仲綱の装束は、一
来法師の合戦の後に述べる。

三十八句、よりまささい

足利又太郎忠綱の語に、

むさしとしもづけのさかひに、ばんどう太郎ときこ
えしとねがはといふ大かあり、こがすき、ながみの
わたりとて、ともに大事のわたりなり、ち、ぶとあ
しかと中たがひて、つねにかつせんをつかまつり
……

とある。覚一本と差がある。足利又太郎先陣の条、

同くつばみをならぶるつはものども、をの寺のぜん
じ太郎、ひやうごの七郎太郎、さぬきの四郎太郎ひ
ろつな、をむろ、ふかす、山がみ、なはの太郎、ら
うどうに、たんの二郎、ねの六郎、大おかのあん五
郎、まきりふの六郎、こぶかの二郎、たなかのそう
太をさきとして、三百よきぞうち入たる。

覚一本と大差あり。源平盛衰記卷十五、宇治合戦の章の
人名と類する所がある。盛衰記の影響と認むべきか。

あしかはかちのひた、れに、あかがはのよろひき
て、しらつきげなるむまに、きんぷくりんのくらを
ひてのつたりけり

とあり、覚一本と差あり。鎌倉本とも大差あり、やや簡
略である。

いせむしやはみなひおどしのよろひきて……

この歌の作者を、「いかなる人やよみたりけん」とある。覚一本は、「伊豆守見給ひて」とある。三位入道頼政最後の後に伊豆守仲綱、六条藏人仲家等の討死を述べるのは、覚一本とは反対である。

三十九句、たかくらの宮さいご
覚一本と少し差がある。

四十句、ぬえ

覚一本と少し差がある。三井寺炎上も覚一本と少し差がある。以上巻四は覚一本と大差のある巻である。他の八坂流甲類本とも大差がある。注目すべき巻といふべきか。

○平家巻第五

四十一句、みやこうつし

いまのころと、みやこうつしなれば、かやうにし給ふにやとぞ人申ける、あはれきうとはめでたくありつるみやこぞかし、わうじやうのしゆごのちんじゆは、四はうにひかりをやはらげ……（二首の歌）

次に、

みやこうつりはこれせんじうなきにはあらず、神む
天わうと申は、ぢしん五だいのみかど……

とあつて、記述の順序に差がある。

四十二句、月見

とく大じのさ大しやうさねさだのきやうは、……八月十日あまりにふくはらより、みやこのかたへのぼられけり、なに事もむかしにかはりはて、のころいゑはもんぜんくさふかく、ていじやう露しげし、あさがはら、よもきがそま、とりのふしど、あれはて、

とある。佐々木本（天理図書館蔵）には、

道すがら名所々々ノ月ヲミル、雀松原、ミカゲノ松、空ヨリオツル布ビキハ、月ニヤイトゞサラスラン、毘野、松原、芥川、月ノ桂ノ川船ヤ渡セル袖モ希也ケリ、同十五日旧都二着給フ

とあり、琵琶法師の語りを伝へたものか。盛衰記巻第十七、実定上洛事に、

雀ノ松原、ミカゲノ松、雲井ニサラス布引ハ、我朝第二ノ滝トカヤ、……

とあるによつたものか。近衛河原の大宮を訪ひ、御琵琶を聞き、待宵の小侍徒にあふ。この女房の待宵の小侍徒と呼ばれた所以を述べる。その前に、
大みやはきうとのあれゆく事共をかたらせおはしませば、大しやうはいまのみやこのすみよき事をぞ申

されける

とある、覚一本になし。その他覚一本と少し差がある。

四十三句、もつけのまき

おりふし人もまいらず、こはいかにと見給へば、おほくのしやりかうべ共がひとつにかたまりあひて、たかさ四五ぢやうもありけん[△]とおほしくて、一ツの大かしらに十まんのまなこあらはれて、にう道をにらまえて、また、きもせず、

とある、覚一本と差がある。節刀の条、厳島大明神について、高野に遁世された宰相入道成頼の語に、

しやかつらりうわうのだい三のひめのみやなれば、女神とこそうけ給はれぞくたいにて見え給ふこそ心ゑねとの給ひければ、あるそうの申けるは、それわくはうすいじやくのはうべんまちくなれば、三みやう六つうのみやう神にてあるときはぞくたいともげんじ給はん事かたかるべきにあらざとぞ申されける

とある、覚一本と大差があり、節刀を頼朝に給はつた後に、春日大明神の、その後には大職冠の御末、執柄家の君達にも給ふべきといふ覚一本の記事はない。

四十四句、よりとむほん

又はたけ山の次郎、みうらのいくさしたける事は、

ち、のしやうじしげよし、おぢを山だのべつたうがおりふしぎいきやうしたりけるをたすんためとぞご日にはきこえし、はたけ山しやうじしげよし、を山だのべつたうありしげ、うつのみやさゑもんのじうともつな、これら三人はおほばんやくにて、おりふしぎいきやうしたりけるを、大じやうにう道いかつて三人をめしよせ、げんじにどうしんせじといふきしやうもんをかきてまいらせよとの給へば、かしこまつてぞした、めまいらせける

とある。傍線を附した所は、覚一本にはなく、屋代本にあり、この条は関係があると認められる。朝敵揃、五位鷲の事は覚一本と略同文。

四十五句、かんやうきう、

燕の太子丹の説話、覚一本と少しく差あり。屋代本は燕丹の帰国を止めんとて楚国の大河に橋を落ちるやうに計略した由を脱する。燕丹荆軻といふ勇士を語らひ、始皇帝を討たんと計る。荆軻、樊於期といふ勇者を語らひ、始皇帝の都、咸陽宮に参り、始皇帝にあひ、始皇帝の後の琴の音に機を失ひて始皇帝を討つことができず、却つて誅罰せられた。この説話をさしはさんだ平家物語の作

者は、一に頼朝の運命の危きを望んだ人のあつたことを示すためであらうか。

四十六句、もんがく

覚一本と略同文である。

四十七句、平家とうごくげかう、

九月二十二日、新院（高倉上皇）の厳島参拝の事があ
る。覚一本も同じであるが簡略である。本書は詳細であ
る。

九月廿二日しんゐん又いつくしまへ御かうなる、御
ともには、さきのう大しやうむねもり、五でうの大
なごんくにつな、とう大なごんさねくに、六かくう
ひやう衛のかみいゑみち、てん上人には、とうの中
將しげひら、くないのせうむねのり、あきのかみあ
りつななどぞきこえし、さんぬる三月にも御かうあ
つて……

とある。盛衰記卷二十三、新院厳島御幸の章にも御
供があり、盛衰記によつたものか。

四十八句、ふじがは

さるほどに平家の人々は、みやこをたちて、……せ
んぢんはすでにかんばら、ふじがはにす、めども、
ごぢんはいまだてごしうつのやにさ、へたり、

中にもくはうごぐうのすけつねまさは、しいかくは
んげんにちやうじ給へる人なれば、かゝるみだれの
中にも、心をすましみづうみのみぎはにうちいで、
まん／＼たるおきにこじまの見えけるを、とうひや
う衛のじうありのりをめして……（竹生鳥参詣の事）
とある。覚一本は卷七、竹生鳥詣の事である。本文は覚
一本と略同文。

以下は覚一本と略差なし。

四十九句、五せつのさた

おなじくふくはらに十一月十三日だいらつくりいだ
して御せんかうあり、此京はきたは山そびえて、み
なみはうみちかふしてひきければ、なみのをとつね
にかまびすしく……十月のすゑ、ひがしがはにぎや
うかうなつて、御けいあり、だいらのきたのにさい
ぢやうしよをつくりて、じんぶぐじんぐをと、のふ
とある。覚一本は次の都帰りの章の一節である。この他
は覚一本と略同文である。

五十句、ならえんじやう

覚一本と略同文である。

○平家卷第六

五十一句、たかくらのみんほうぎよ

覚一本巻六の新院崩御と略同文。佐々木本（天理圖書館蔵）とは大差がある。

五十二句、もみぢのまき

覚一本と略同文。

五十三句、あふひのねうご

小督の事が葵の女御の次にある。覚一本に比してや、差が多い。「たまづさを今は」の歌に続き、隆房の歎きを述べて、

たゞしなんとのみぞねがはれける、あふてあはざる
うらみもあり、あはでおもひふかきもあり、あはで
おもふこひよりも、あふてあはざるうらみこそ、せ
んかたなふはおもはれけれ、大じやうにう道、此
よしをつたへき、給ひて、御ひめは中ぐうにてだい
りへわたらせ給ふ、れむぜいのせうしやうのきたの
かたもおなじく御むすめなり、此こがうどの一かた
ならずかやうにありしあひだ、大じやうにうだう、
いや／＼此こがうがあらんほどは、此世の中あしか
りなんす、こがうをきん中をめしだいさばやとぞの
給ひける

とある。この章（小督）は覚一本とかなり差がある。

にう道しやうこく、いかゞしたりけん、此よしをつ
たへき、給ひて、きみこがうをうしなひ給ひたりと
いふ事は、あとかたもなきそらごとにてありけり、
そのぎならばとつねはの給ひけるが、こがうのとの
をたばかりいだしで、あまにぞなされける、しゆつ
けは日ごろよりのおもひまふけたるみちなれども、
心ならずあまになされて、とし廿三にて、こきすみ
ぞめにやつれつ、さかのへんにぞすまれける。

とある。

五十四句、よしなかむほん

心もならばものなくしてつねにはいかにもして平家
をほろぼして世をとらばやなんとぞ申ける、かねと
を大きによろこんで、そのれうにこそ、きみをば此
廿四ねんやういく申候へ、かくおほせられ候こそ、
八まんどの、御すゑとおほえさせ給へと申ければ、
木そ心いとゞたけくなつて、ねの井のおほやたしげ
の、ゆきちかをはじめとして、こく中のつはものを
かたらふに、一人もそむくはなかりけり、かうづけ
の国には、こたちはきせんじやうよししかたのよしみ
によつてなはのひろずみをはじめとして、たごのこ
ほりのもの共、みなしたがひつく

とある。覚一本と大差がある。

五十五句、にう道しきよ

前句の終に、

上下しきだいして、もつともしかるべふ候、さやうにも候はゞ、たれもしりあしをばふみ候はじ、ぶくはんにそなはり、ゆみやにたづさはらん人々は、みなう大しやうどのを大しやうとして、とうごくへはつかうすべきよしをこそせんげせられけれ、

とある次に、にう道しきよとありて、

同廿七日さきのう大しやうむねもり、源氏ついはつとうごくへのかとでときこえしかど、にう道しやうごくれないならざる事いでき給へりとして……

より始まる。覚一本と略同文である。屋代本は大に異なる。

築島（覚一本）も略同文。

五十六句、ぎをんのねうご

以下卷末までは覚一本と略同文で、祇園女御の次に慈心房、流砂葱嶺（秘事）がある。覚一本と順序が逆である。又その文も大差がある。

此にう道しやうこくと申は、じゑ大そう正のけしんなりといへり、そのゆへは、つの国にせいちやうじといふ山でらあり、此てらのぢうそうに、じゑんば

うそんゑとて、天がにきこえたるぢきやうしやありもとはさんものぢうりよたりしが、だうしんをおこし、りさんして、此寺にぢうしけるが、たねんほけきやうをたもつものなり、さんぬるかおう二ねん二月廿二日の夜のやはんばかりに、じゑんばうがゆめに見るやうは、じやうへきたるぞく二人、どうじ三人、一つうのじやうをさゝげていできたり、じゑんばう、それはいづくよりにて候ぞとへば、ゑんま大わうぐうよりと申、そのとき、じしんぼう、此じやうをとりひらきて見れば、きたる廿六日さうたゑんよりゑんま大わうぐうの（大）こくでんにて……とあつて、覚一本と大差がある。これは鎌倉本と同文であり、鎌倉本は次に祇園女御の文があり、又流砂葱嶺（秘事）があつて、本書は鎌倉本と同類の本文と認められよう。祇園女御の事は覚一本と略同文。流砂葱嶺の事は、宗論（秘事）である。じしんばうそんゑの事を少しくひくと、

ゑんまわうぐうの大こくでんへぞまいりける、十まんのそのうどもまいりあつまり、れきくとして、をのくぢきやうす、ほうゑのぎしきまことに心もことばもをよばず、ほうゑおはりしかば、しよそう

共いとま給はつて、かへるもあり、とゞめらるゝ、そのもあり、そのうちにじしんばうは、ゑんまほふわうの御まへにめされてまいり、まづていじやうにかしこまつてさぶらひければ、ゑんまほうわう、ほけきやうは、五十てんくくのくどくあり、いかゞぢきやうじやをていじやうにはをくべし、これへめせとて、御ざちかくめされ、じしんぼう、ごしやうのざいしよはいかなるところにて候はんずるやらんと申せば、ゑんまわう、わうじやうふわうじやうはたゝ人のしんふしんによるとぞの給ひける……（鎌倉本同文）とある。

○平家巻第七

六十一句、平家ほつこくげこう

巻頭に覚一本巻六の最後の文がある。

じゆゑい二年二月廿二日、しゆじやうはてうきんのためにほうぢうじどのへぎやうかうなる……したがひつくものなかりけり
そのころ木そとひやう衛のすけとふくはいの事いできたる

とある。鎌倉本、佐々木本、屋代本に類する。鎌倉本、佐々木本、屋代本の本文がよく、百二十句本は誤りがある。覚一本巻七とは差が甚しい巻である。

木そはやがてゑちこへうちこえて、じやうの四郎とかつせんす、いかにもしてうちとらんとしけれども、ながもちしうぐ五きにうちなされ、ゆきかたしらずぞおちにける、ゑちこの国をはじめて、ほくろくだうのつはものみな木そにしたがひつく、木そはとうせんほくろくりやうだうをうちしたがへて、たゝいまみやこへせめ入べしとぞきこえける、平家はこんねんよりみやうねんはむまくさかひにつけて、かつせんすべしとひろうせられたりければ……（以下略）

とあり、佐々木本、屋代本に類する。

覚一本は平家北国下向の事の次に、経正の竹生鳥詣がある。百二十句本は巻五の富士河合戦（第四十八句）に入る。本文は略覚一本に類する。

六十二句、ひうちかつせん

覚一本と大差がある。最後の方に（覚一本は願書）木その給ひけるは、平家は大ぜいにてくだるなり、山うちこえて、くろざかのすその、まつざかのやな

ぎはら、ぐみの木はやしのひろみへいづるものならば、はしりあひのかつせんにてこそあらんずれば、はせあひのかつせんは、いかにもせいのおほくすくなきによる事なり、大ぜいかさにかけられてはかなふまじ、からめてをまはせやとて、たての六郎ちかたゞ、七千よきにてきたくろざかへまはる、にしな、たかなし、やまだの次郎、七千よきにてみなみくろざかへむかふ、わがみは大てより一まんよき、又一まんよきをば、まつざかのやなぎはらにひきかくし、いま井の四郎かねひら六千よきにてわしのせをうちわたり、ひのみやばしにぢんをとる……

とある。鎌倉本は覚一本と略同文。本書は佐々木本、屋代本と略同文である。

六十三句、木そのぐはんしよ

覚一本の倶梨迦羅落をふくむ。この条も覚一本と大差がある。佐々木本、屋代本と同文。

六十四句、さねもり、佐々木本、屋代本と略同文。

篠原合戦は簡略で覚一本と大差あり。

六十五句、げんぼうのさた

覚一本と大差あり。佐々木本、屋代本と同文である。

六十六句、よしなちかうじやう

木そはゑちせんのかうについて、かつせんのひやうぢやうあり、井のうへ九郎、たかなしのくはんじや、山だの次郎、にしなの二郎ながせのはんぐはんじや、あかつまのはんぐはんじや、ひぐちの次郎、いま井の四郎、たての六郎、ねの井のこやたいげ、しかるべきものども百人ばかりまへになみゐたりけるにむかつて、木その給ひけるは、そもくわれらみやこにのぼらんずるに、あふみの国をへてこそこのぼらんずるに、れいの山ぼうしのにくさは又ふせぐ事もやあらんずらん……（佐々木本、屋代本略同文）

とある。木曾の山門牒状は覚一本と略同文である。又返牒も覚一本に略同文。

六十七句、へいけ一もんぐはんしよ

覚一本と略同文。

六十八句、ほうわうくらまおち

覚一本の主上都落以下と本文の順序が異なる所がある。

本書は、

忠度の都落（佐々木本、屋代本同文）

経正の都落（佐々木本、屋代本なし）覚一本に略同文。

維盛の都落（六十九句）（佐々木本、屋代本同文）

池大納言都留、平家一門都落

覚一本は、主上都落、維盛都落、聖主臨幸、忠度都落、
經正都落、青山沙汰、一門都落、福原落の順である。

七十句、へいけ一もんみやこおちに

ひごのかみ、さらばさだよしいとまたび候へとて、
てせい三百よきひきわかつて、みやこへかへりけり、
にし八でうのやけあとに大まくひかせ、一夜しゆく
したりけれ共、かへしいり給ふ平家一人もましまさ
ざりければ、さすが心ほそくやおもひけん、源氏の
むまのひづめにかけてとて、こまつ殿のはかほりお
こし、あたりのつちかもがはにながさせ、こつをば
かうやへをくり、よの中たのもしからずとおもひけ
れば、おもひきりてせいをばこまつの三あの中將ど
の、御かたへたてまつり、われはのりかへ一きぐし
てうつのみやさへもんともつないうちつれて、平家
とうしろあはせにとうごくへこそおちゆきけれ
とあり、佐々木本、屋代本に類する文である。

又宗盛の福原にての語に、

たのしみつきかなしみきたる、なんぞしりよをめぐ
らし、ぢうおんをむくひざらんや、十ぜんのていわ
う、かたじけなくも三しゆのじんぎをたいしわたら
せ給へば、いかならん野のすゑ、山のおくまでもぎ

やうかうの御ともつかまつらんとはおもはずやとの
給へば、らうせうなみだをながし、あやしのとりけ
だものも、おんをほうじ、とくをむくふ心みな候と
こそうけたまはれ、なかにもきうせんばじやうにた
づさはるならひ、ふた心あるをもつてはちとす、此
廿よねむがあひだ、さいしをはぐくみ、しよじうを
たくはゆる事、しかしながらきみの御おんにあらず
といふ事なし……

とある。佐々木本、屋代本に類する文である。

以上を概観すれば、巻七は佐々木本、屋代本の如き本
を以つて書かれたと認むべきであらう。

○平家巻第八

七十一句、四みやそくゐ

覚一本巻八の巻頭には、山門御幸とある。覚一本とは
かなり本文に差がある。紀伊守範光の和歌なし。佐々木
本、屋代本と同文である。

平家太宰府落の事も、

九こく二たうのつはものどもめされけれどもりやう
じやう申ながらいまだまいらず、いはどのしよきや
う大くらのたねなふばかりぞ候ひける、平家はあん

らくじへまいり、うたをよみ、れんがをしてたむけ
たてまつりけり、その中にほん三ゐの中將しげひら、
すみなれしふるきみやこのこひしさは神もむかし
をわすれたまはじ

と申されければ、みな人そでをぞぬらされける

とある。この文は佐々木本と異なる。佐々木本は簡略、
次に四宮即位、惟喬惟仁位争事がある。本書も順序は覚
一本と同じであるが、本文は大差がある。

八月廿日みやこには四のみやほうわうのせんめいに
て、かんゐんでんにて御そくゐし給ふ、しんじほう
けん、ないしどころなくしてせんそのれい、これは
じめとぞうけ給る、せつしやう、この衛どのは、平
家のむこにてましくけれども、さいこくへも御ど
うしんにてくだらせ給はぬによつてなり、天に二ツ
の日なく、ちに二人のおうなしと申せども、平家の
あくぎようによつて、とひに二人のみかどましく
けり、三のみやの御めのとほ、なきかなしみてこう
こはいすれどもかひぞなき、ていわうくらゐにつか
せ給ふ事、ばんぶのとかくおもひよらざるに、たゞ
天しう大神正八まんぐうの御はからひとぞおほえけ
る、むかしもんどく天わうは……

とある。佐々木本も、

同八月廿日都二ハ法皇ノ宣命ニテ四宮閑院殿ニテ御
位二即セ給、撰政殿本ノ撰政近衛殿ハ替ラセ不給、
三宮ノ御傳母泣悲後悔スレ共無甲斐ゾ、天二二ツノ
日无ク国二二リノ王无トハ申共、平家ノ依悪行社都
鄙二二人ノ王ハ坐ケレ、惟喬惟仁位争事

昔文徳天皇ハ……

とあつて略同文である。

七十二句、うさまふで

覚一本と差あり、

七十三句、をだまき

平家の宇佐詣は、覚一本と略同文。この章は、覚一本
と大差あり。

いはやのうちより五ぢやうばかりなる大じやにてぞ
いでける、かりぎぬのくびのうへにさすとおもひつ
るはりは、大じやののどぶへにぞさしたりける、を
んなまことにきもたましましゐもみにそはず、めのとぐ
したるしよじう共おめひてにげさりぬ、くだんの大
じやと申は、ひうがの国にそうぎやうせられけるた
かちをの大みやうじんこれなり、をんなかへりて、
いくほどなくてさんしてけり、とりあげ見れば、ま

ことになんしなり、これを七さいまでそだてたれば
ならびなき大ちからにてぞありける（以下略）

とある。屋代本と差がある。

清経入水の所は、

さるほどに、こまつどの三なん、さ中じやうきよつ
ねは、ある夜ふねのやかたにたちいで、なに事にも
おもひしり給へる人にて、心をすまじよこぶゑのね
とり、らうえいして、こしかたゆくすゑの事どもの
給ひつゞけて、みやこをは源氏がためにをひおとさ
れ、ちんぜいをばこれよしがためにせめおとされ、
あみにかゝれるうほのごとし、いづちへゆかばのが
るべきかは、ながらへはつべき身にあらず、しづか
にきやうをよみねんぶつして、つきにうみにぞ入給
ふ、なんによなきかなしみけれどもかひぞなき、

やなぎのうらおち

やなぎのうらにもだいらつくるべき議定屋せんぎありしか

ども、ぶんげんなければつくられず又△ながとよりよ
するときこえしかば、又あまのをぶねにのり、うみ
にぞうかひ給ひける、ながとの国は……

とある。△に屋代本は宇佐行幸の事がある。覚一本と大
差がある。佐々木本と類する所もあるが、又差がある。

七十五句、よりともゑんぜん申
覚一本と大差あり。

よりともは、みやこにのぼらん事もたやすからじと
て、ゐながらせいぬしやうぐんのせんじをかふむる、
御つかひはさししやうなかはらのやすさだとぞきこ
えし、やすさだはいゑのこ二人、らうどう十人ぐし
けり、じゆゑい二年十月四日、やすさだかまくらに
下ちやくす、ひやうゑのすけの給ひけるは、よりと
もはる人の身なりしかども、ぶゆうのめいよちやう
ぜるによつて、いまはゐながらせいぬしやうぐんの
せんじをかふむる、いかでかわたくしにては給るべ
き、つるがおかのやしろにてたまはるべしとて、わ
かみやへこそまいられけれ……（屋代本同文）

とある。覚一本、佐々木本等と大差がある。

七十六句、木曾ねこまのたいめん
覚一本と差がある。

中なごんもししよくされずしてはあしかりぬべけれ
ば、はしをたてて、しよくするやうにし給ひけり、
木そはおなじていにて居屋あたりけるが、のこりすくな
くせめなして、ねこどのはせうじきにおはしけるや
め責屋され給へとぞす、めける、中なごんのは給ひあは

すべき事どもありておはしたれ共、此事どもにこま
くどものたまはず、やがていそぎかへられぬ
とある。佐々木本とも差がある。屋代本に略同文。

七十七句、みづしまかつせん

覚一本と差がある。

七十八句、せのおさいご

覚一本と大差がある。

木そこれをき、一まんよきはせくだる、こゝに平
家のさぶらひにきこゆるつはもの、びつ中の国のぢ
う人、せのおの太郎かねやすといふものあり、さん^{屋ナシ}
ぬる五月にとなみ山にていけどりにせられたりしを、
さこふるかうのものなればとて、木そおしんでさら
れず、かゝの国のぢうん、くらみつ三郎なりずみに
あづけられたりけるが、せのおあぶかりのくらみつ
に申けるは、木そ殿さんやうだうへ御くだりとうけ
たまはり候、かねやすがちぎやうのところ、びつ中
のせのおと申ところは、むまのくさかひよきところ
にて候、申て御へん給はらせ給へかし……
とある。以下覚一本と大差があり、佐々木本とも異なり
て、屋代本と同文である。注目すべき文である。

最後は、行家が、

いづみの国へをしわたり、かはちの国ながの、じや
うにぞこもりける、平家はむろ山のいくさにかつて
こそいよく大ぜいつきにけれ
とある。室山合戦がない。脱したか。

七十九句、ほうじうじかつせん

みやこにはさんぬる七月より源氏のせいみちくゝて、
ざいくしよくにいりどりおほし、かもやはたの
御りやうをもきはらず……

とある。覚一本の鼓判官と法住寺合戦の二章にあたる。
覚一本と大差あり。鼓判官の事、屋代本と同文である。

今井兼平と義仲の応答に、屋代本、

是ハ鼓判官メカ凶害ト覚ルソ、相構テトラヘテ様ヲ
立申セトソ宣ケル、関々ハ被閉テ絶テ上ル物モナケ
レハ、冠者原力無甲斐命イカントテ、時々片辺ニ付
テ入取セシハ何カ僻事ナラン、又王城守護シテ有覽
ズル物カ馬一疋ツ、銅テ乗サルヘキカ、イクラモア
ル田共少々カラセテ時々マクサニセンハ、強ニ法王
ノトカメ給ヘキ様ハ無物ヲ、鎌倉右兵衛佐返聞シ処
モ有、軍ヨウセヨ者共、今度ハ最後ノ軍ニテアラム
スルト云ケル

とあり、本書と同文である。屋代本の如き伝本によりて

書いた文であらう。

たいふかくめいす、みいで、申けるは、くはんばくにはたいしよくはんの御すゑ、しつぺいのきんだちこそならせ給ひ候なれと申ければ、さてはちからをよばずとてならず、ほうわうを見たてまつりておんと申せば、ほうしと心ゑ、しゆじやうのおさなく御げんぶくなかりけるを見まいらせては、わらはと心えたりけるこそあさましき、ゐんにもならず、くはんばくにもならず、ゐんのむまやのべつたうにをしながら、たんばの国をちぎやうしけり、さきのくはんばくまつどの、ひめぎみをとりにたてまつりむことなる。

とある。以後覚一本と異なり、屋代本と略同文である。

○平家巻第九

八十一句、うぢがは

この巻九もすべてにわたりて覚一本と大差あり。屋代本は巻九を欠く。注目すべき所を少し示さう。

鎌倉本、佐々木本は覚一本に類し、本書のみの特質ともいへようか。

正月十七日ゐんの御所より木曾さまのかみよしなか

をめて、平家ついでづのためさいこくへはつかうすべきよしおほせくださる、木そかしこまつてうけたまはりまかりいづ、やがてその日さいこくへのかどですときこえしが、とうごくよりすでにうちてすまんぎのほるときこえしかば、木そさいこくへはむかはずして、うぢせたりやうはうへつはものどもをわけてつかはす、木そはじめは五まんよきときこえしが、みなほつくへおちくだりて、わづかにのこりたるつはものども、おぢの十郎くらんどゆきいゑかはちの国ながの、じやうにこもりたるを、うたんとて、ひぐちの二郎かねみつ、六百よきにてけさかはちへくだりぬ、のこるせい、ゐま井の四郎かねひら七百よきにてせたへむかふ……

とある。これは傍線を付した如く、中院本と略同文である。八坂流の後出の伝本といふべきである。覚一本と大差あり。中院本の一部が本書と一致することは注目すべき事である。

「大ぐしのしげちかかちだちのせんぢんの事」には、一どにどつとぞわらひける、九郎御ざうしをはじめたてまつり、二まん五千よきうちいれくわたしけり、むま人にせかれて、さばかりはやきうぢがはも、

しもはせかれてあさかりければ、さう人どもむまの
したてにとりつきくわたしけり、さ、きの三郎、
かぢはらへいじ、しぶやのうまのじう、これ三人は
むまをすて、げゝをはき、ゆんづゑをつき、はし
のゆきげたをこそわたりけれ、そののちはたけ山の
りかへにのりてうちあがる……

とある。覚一本になし。中院本に類する文である。

八十二句、よしつねゐんざん

よしなかは、うぢせたやぶれぬとき、しかば、さい
ごのいとま申さんとて、百きばかりにてゐんの御し
よ六でうどのへはせまいる、あはや木そがまいり候
ぞや、いかなるあくぎやうかつかまつらんずらんと
て、君もしんもをそれわな、き給ふところに、とう
ごくのつはものども、七でうがはらまでうちいりた
るよしつげたりければ、木そもんのまへよりとつて
かへす、御しよにはやがてかどをさしけり、木そは
さいあいのをんなになごりをおしまんとて

とあり、覚一本、中院本になし。以後覚一本、中院本と
大差あり。

八十三句、かねひら

ともえのいくさ、

かねひらさいご、
よしなかさいご、

ちの、太郎みつひろうちじに

がある。覚一本と大差あり。以後も又中院本とも差があ
り、屋代本巻九の本文を追及することは困難である。以
後全文は比較に堪へぬ程である。

○平家巻第十

九十一句、平家一もんくびわたさる、事

じゆゑい三年二月十二日、さんぬる七日一のたにに
てうたれたる平家のくびども京へいる、平家にゑん
をむすばふれたる人々、わがかたざまになに事をか
きかんずらん、いか成めをか見んずらんとて、なげ
く人々おほかりけり、その中に大かくじにかくれる
給へるこまつの三るの中將のきたのかたは、さいこ
くへうちてのむかふとさくたびに、こんどのいくさ
に中將のいかなるめにかあひ給はんずらんとしづ心
なくおもはれけるところに、平家は一のたに、ての
こりすくなくほろび、三るの中將といふくぎやう一
人いけどられてのほり給へるとき、しかば……

とある。傍線を付した所は、覚一本と異なり屋代本巻第

十の巻頭の文と略同文であり、屋代本の如き伝本によつたと認められよう。

「けいしやうのくびおほちをわたすかいなやの事」の条には、義経の言上に、父義朝の首わたされたる由屋代本になし、本書あり。「三ゐの中將の「ふみ」の条には、

三ゐの中じやうもかよふ心なれば、みやこにさこそわれをおほつかなふおもふらめ、くびのなかには見えねども、水のそこにやしづみつらんとて、なげきなんどもすらめ、いまだ此の世にながらへたりとしらせばやとはおもへども、しのびたるすみかを人に見せんもさすがなればとて、なくくあかし給ひけり、よるにもなれば、よ三ひやう衛しげかけ、いしどう丸なんどいふもの共そばにめし、みやこにはたゞいまわが事をこそおもひいでつらめ、いとけなきもの共はわする、とも、人はよもわする、ひまあらじ……(中略)せめての心ざしのふかきほどもあらはれける。

この所は屋代本と略同文である。従つて本書は屋代本の如き文を伝へたのである(実際は琵琶法師の語りか)。

九十二句、やしまゐんぜん

覚一本はこの前に内裏女房の事がある。本書はその一

部を述べて他は後に出す。

同十四日ほん三ゐの中將しげひら、六条をひかしへわたされ給ふ、にう道にも二ゐのにもおほえのこにておはしければ、一もんの人々にももてなされ……ほりかはのみだうにいれたてまつる、とひの次郎さねひらはもくらんぢのひたゝれに、ひおどしよろひきて、三ゐの中じやうどうしやしたてまつる、つはものども六十よ人ぐしてしゆごしけり、ゐんより御つかひあり……

とある。屋代本と略同文である。屋代本には院宣の文なく、本書には、院宣の本文があり、覚一本の文と差がある。院宣の後に、

ゐんぜんの御つかひには、御つほのめしつぎ、はながたをくだされけり、三ゐの中將のつかひには、いにしへめしつかひし平さへもんのじうしげくにをつかはされけり、おほいどの平大なごんどのへ、ちよくぢやうのおもむきぢうぐ申くださる、は、の二ゐどのにもこまかなる御ふみ共にて、いま一ど御らんぜんとおぼしめされ候はゞ、ないしどころの御事なくく申させ給へと(中略)二ゐどのは、ほん三ゐの中じやうのふみを見給ひて、此ふみをしまき、

おほいどの、御まへにたはれふし、の給ひけるは、
なにのやうかある、はやないしどころかへしいれた
てまつり、中じやうたすけて見せ給へ、よにあらん
とおもふも、こどものためなり、われをたすけんと
おもひ給はゞ、中じやうをいま一ど見せ給へとぞな
かれける、又人々の申けるは、ていわうの御くらゐ
をたもたせ給ふと申は、ひとへにないしどころの御
ゆへなり、これのみやこへかへし、いれたてまつら
ば、君はなにの御たのみにて、よにもわたり給ふべ
き、いかでかきみをすてまいらせて、おほくのしも
んをはほろぼさんとはおほしめし候やらんとめん
くうらみ申されければ、二ゐどのもちからをよ
び給ず、平大なごんときたゞ、おんぜんの御つかひ
花かたをめしよせて……

とある。覚一本と大差あり。屋代本も略同文であるが、
院宣の文はなし。

「平家おんぜんの御返事」は、覚一本と少し差がある。
屋代本は全く異なる文である。

九十三句、しげひらじゆかい

覚一本と大差がある。

三位の中將どひの次郎をめして、しゆつけの心ざし

あるをいかゞすべきとの給へば、どひの二郎、此や
うを御ざうしに申、御ざうし、おんへそうもんせら
れけり、あるべうもなし、よりともしに見せてのちこ
そほうしにもなざめとて、御ゆるされもなかりけれ
ば、ちからをよび給はず、わがざいせのときげんざ
んしたるひじりにごしやうの事を申あはせんとおも
ふはいかにとの給へば、どひの二郎、御ひじりはた
れにて候やらん、くろたにのほうねんばうとぞの給
ひける、さればとてほうねんしやう人をしやうじた
てまつる、三ゐの中じやういでむかひたてまつり申
されけるは、さてもなんとをほろほし候事、よには
みなしげひら一人がしよぎやうと申候なれば……
とある。屋代本と略同文である。屋代本の如き本によつ
たか。次に、「しげひらおほうち女ばうたまづさ」、「し
げひらとにようばうとさんくはいの事」は、覚一本の内
裏女房の章である。覚一本と大差がある。

八でうのねうおんに、むくうまのじうまさときとい
ふさぶらひあり、あるくれがた、どひの次郎がもと
へゆきて申けるは、中じやうどの、もとめしつかは
れ候ひし、むくうまのじうと申ものにて候が、八で
うのねうおんにけんざんの身にて候なり、さいこく

へも中将殿の御ともつかまつるべふ候つれ共、ゆみのもとすゑをもしり候はねば、たゞなんぢはとまれとおほせられ、さいこくへは御ともつかまつらず候
……

とある。屋代本の文と略同文である。政時の重衡の文を持ちて内裏へ参る条以下は佐々木本に類する所があり複雑な文である。以下は覚一本と略同文である。屋代本と覚一本の合成といへよう。

九十四句、しげひらあづまくだり
覚一本の海道下と差がある。

三ゐの中じやうしげひらをば三月十三日くはんとうへこそくだされけれ、かぢはらへいざうかげとき、どひの次郎がてよりうけとつてぐしたてまつてぞくだりける、さいこくよりいけどられて、こきやうへかへるだにかなしきに、なにか、あづまぢはるかにおもむき給ひけん心のうちこそあはれなれ、あはたぐちをうちすぎて……(以下略)

とある。屋代本と同文である。然し屋代本には、如何ナル宿業ノ口惜サゾト悲給へドモ無甲斐リ、葛鶏冠木ノ葉茂リ心細キ宇都山手越ヲ過テ行バ、北二遠ザカテ雪白キ山有、アレハ何クヤ覽ト問給フ、甲

斐ノ白根トゾ申ケル、其時中将、

惜カラヌ命ナレドモ今日マデニツレナキカ井ノ白根ヲモミツ

清見関モ過ケレバ、富士ノ裾野ニモ成ニケリ

とあり、覚一本、佐々木本、鎌倉本、百二十句本と大差があり、百二十句は脱文がある。

せんじゆのまへゆどのへまいる事

せんじゆしげひらゆうゑんの事

も、覚一本と大差がある。

三ゐの中じやう、しゆごのぶしにむかひ、さても此けいせいはいたいけしたるものかな、なをばなにといふやらんと給へば、かの、すけかしこまつて申けるは、あれはてごしのちやうじやがむすめにて候が、心ざまのゆうにやさしく候とて、ひやうゑのすけ殿、此三四ねんめしつかはれ候が、なをばせんじゆのまへと申候、ひやう衛のすけ殿、三ゐの中じやうかやうにの給ふよしつたへき、給ひて、此女ばうをはなやかにした、せて、三ゐの中じやうもとへつかはさる、そのゆふべあめふり世の中うちしづまりて、ものすさまじかりけるおりふし、くだんの女ばう、びはことをもちてまいりたり

とある。

九十五句、よこぶえ

覚一本と大差あり、屋代本に類する所もあり、本文は覚一本、屋代本の混合した文である。

けんれいもんあんのざうしによこぶえといふをんなをおもひて、さいあいしてかよひけり、かのをんなのゆらいをくはしくたづぬるに、もとは江ぐちのちやうじやうがむすめなり、こ大じやうにう道殿ふくはらげかうのとき、ちやうじやがしゆくしよへいり給ふに、よこぶえ十一さいと申すに、へいじとりにぞいでたりける、にう道これを見給ふに、見めかたちゆうなりければ、中ぐうのざうしにめざる、かゝるわりなきびじんなれば、よこぶえ十四、たきぐち十五と申としよりあざからずおもひててぞかよひける、

ち、もちよりこれをき、、なんぢをよにあらんもの、むこにもなして、よきありさまを見きかんとこそおもひしに、いつとなくしゆつしなどもけだいがちなる物かなと、あながちにこれをせいしけり、たきぐち申けるは、せいわうほとき、し人……

とある。覚一本なし。屋代本は、

十三ノ時本所へ参り、建礼門院ノ曹司横笛ト云女ヲ思最愛シテ通ヒケレハ、父以頼聞之、汝ヲハ世ニ有覽者ノ聳ニ成ントコソ思フテ、是ヲ制シケレハ、滝口申ケルハ、西王母ト聞ヘシ人モ昔有テ今ハ無シ……

とある。百二十句本の増補。

九十六句、かうやのまき

維盛が滝口入道に對面して弘法大師の廟に参りたる後、たうだうじゆんれいして、おくのゐんへぞまいり給ふ、大しの御べうをはいし給ふに、心もことばもをよばず、大たうと申は、なんでんのでつたうをへうして、たかさ十六ちやうのたほうなり、こんだうと申は、とそつのまにでんをへうして、四十九ゐんにつくられたり、上には千たいのあみだによらい、中ぞんはやくしの十二じん、せんじゆの廿八ぶしゆ、みなこれ大しの御さくなり、そもくゝゑんぎのみかどの御とき、御むさうのつげあり、ひはだいろいろのぎよいをかの御山へをくられけるに……

とある。覚一本と大差あり(その他も同じ)。

九十七句、これもりしゆつけ

この章も覚一本と大差あり。

しげかげもいしどう丸も、はら／＼となきて、しほしも物も申さず、やゝあつて、よ三ひやう衛なみだををしのごふて申けるは、おやにて候し、よ三ざへもんかげやすは、へいぢのかつせんるとき、こまつどの、御ともに候ひけるが、二でうのほりかはのへんにて、あくげんだに御むまをいさせ、りんぼくのうへにはねおとされ給ふ、よしどものめのと、かまたひやう衛まさきよろこふでかゝり候ひけるに、かげやすなかにへだたり、かまたとくみしに、あく源たおちありて、かげやすうたれ候ひぬ、そのまぎれにしげもり御のりかへにめされ、二でうをひがしにはせのび給ふ、しげかけそのときは二さいとかやにて候ひし、七さいにしては、にをくれ、その、ちはあはれむべきしたしきもの一人も候はざりに、こまつどの、あはれわがいのちにかはりたるもの、こなればとて、ことにふびんにまし／＼て……

とある。傍線を付した所は、覚一本屋代本、にはなく、後の増補で平治物語による所であらうか。

いはたがはにもつきしかば、此かはを一たびわたる人、あくぐうぼんなう、むしのざいしやうもしょうするなる物をと、たのしくぞわたり給ふ、むかひの

きしにあがりたちかへり、水のおもてをまほらへて、さめ／＼となき給ふ、たきぐち、とにかくにつきせぬ御なみだにて候、さりながらたゞいまは、なに事をおほしめしいで候やと申ければ、三ゐにう道、なんぢはしらずや、さんぬるぢしう三年五月のころ、おとゞくまのさんけいのとき……（以下長文略）

とある。屋代本は簡略である。
九十八句、これもりじすい
覚一本と大差あり。

ころは三月廿八日の事なりければ、はるもすでにくれなんとす、かいろはるかにかすみわたりて、あはれをもよをすたぐひなり、おきのつりぶねうきぬしづみぬ、なみのそこに入やうに見ゆるもあり、みなわがみのうへとやおもはれけん、きがんくも井にをとづれゆくをき、給ふにも、こきゆうにことづてせまほしく、そぶがここのうらみまで、おもひのこせるかたぞなき、三ゐの中じやうにしにむかひててをあはせ、かうじやうにねんぶつをとなへ給ふが、ねんぶつをとゞめ、たきぐちにうだうにの給ひけるは、あはれ人の身にもつまじきものはさいしにてありけるぞ、たゞいまもなをおもひいづるぞとよ、お

もふ事心にとゞむれば、つみふか、らんなれば、さんげするなりとの給ひもあえず、はら〜とぞなかれける

とある。この文は屋代本と略同文で、屋代本の如き伝本によつたと認むべきである。頼義の往生の事の次に、

御せんぞへいしやうぐんは、まさかどをほろほし、八かこくをうちしたがへ給ひしよりこのかた、だい〜く〜の御かためにて、九だいにあたり給へば、きみこそ日ほんこくのしやうぐんにてわたらせ給へべけれ共、御うんつきさせ給ひぬれば、ちからをよばず、されどもしゆつけのくどくはばくだいなれば、せんぜのざいぐうもめつし給ひぬらん、百千ざい百らんをくやうするといふとも、一日しゆつけのくどくにをよはじとこそ申候へ……(以下略)

とある。この文も屋代本と同文である。

九十九句、いけの大なごんくはんとくたり
そのころ、いけの大なごんよりもりくはんとくよりくだらるべきよし、申されければ、大なごんくはんとくへこそくだられけれ、そのさぶらひにやへいびやう衛むねきよといふものあり、しきりにいとま申てとゞまるあひだ、大なごん、なにとてなんぢはは

るかたびにおもむくに見をくらじとするぞとの給へば、やへいびやう衛申けるは、さん候、せんぢやうへだにおもむき給は、まつさきかくべく候が、まいらずともくるしふも候まじ、きみこそかうてわたらせ給へ共、さいこくにおはしますきんだちの御事ぞんじ候へば、あまりにいとをしくおもひまいらせ候(以下略)

とある。屋代本に類する文である。覚一本とは大差がある。

百句、ふちと

覚一本と大差あり、屋代本に類する文である。

以上巻十は屋代本の如き伝本によつたと認むべきである。

○平家巻十一

巻十と同じく全般にわたつて覚一本と大差がある。各句の特長といふべき所を少し引用することとする。

百一句、やしま

(やしまには)三とせにもなりぬ、しかるをとうごくのつはもの共、せめきたるときこえしかば、なんによのきんたちさしあつまつて、なくよりほかの事

ぞなき、同二月十三日、都には廿二しやのくはんべ
いあり、これは三しゆのじんぎことゆへなくみやこ
へかへしいれ給へとの御きねんのためとぞおぼえた
る、同十四日、みかはのかみのりより、平家ついた
うのために七百よさうのふねにのつて、つの国かん
ざきよりさんやうだうをはつかうす、九郎大夫はう
ぐはん二百よさうのふねにのりて、どうこくわたな
べよりなんかいだうへおもむく……

とある。屋代本と略同文である。屋代本の如き伝本によ
つたと認められよう（以下略す）

百二句、あふぎのまと

おきのかたよりじんじやうにかざりたるせうせん一
そう、なぎさによす、いかにと見るところに、あか
きはかまにやなぎのいつゝぎぬきたるをんなの、ま
ことにゆうなりけるが、せんちうよりいで、……

覚一本と大差あり、屋代本には、

奥ノ方ヨリ莊リ尋常ニシタル小船一艘渚ニヨス、渚
一町斗隔テ船ヲ横様ニナス、イカニト見ル処ニ、船
ノ内ヨリ赤キ袴ニ柳五衣着タル女ノ実ニ優也ケルカ、
出テ、

とあり、少しく差のある所もある。傍線の如きは佐々木

本と類する語である（以下略）

よ一二のやのかうみやう、

みをのやのいくさ

ゆみながし

むれたかまつ

とある。

百三句、ざんげんかちはら、

いせの三郎のりよしいけぢる事

たなべのたんぞう源氏にまいる事

すみよしかぶらさうもの事

かまのくはんじやと九郎はうぐはんとはひとつになる

事

とある。覚一本と大差がある。

同十九日、はうぐはん、いせの三郎よしもりをめし
て、あはのみんぶなりよしがちやくし、でないいざ
ゑもんのりよし、かはのをせめにいよの国へこえた
んなるが、これにいくさありときゝて、けふはさだ
めてはせむかふらん、大ぜいいたて、はかなふま
じ、なんぢゆきむかひ、よきやうにこしらゑてめし
てまいれとの給へば、いせの三郎、さ候はゞ御はた
をたまはつて、むかひ候はんと申、もつともさるべ

して、しらはたをこそ給りけれ、そのせい十六きにてむかふが……(屋代本同文)とある。

百四句、だんのうら

梶原と判官と先陣争ひについて、

かぢはらはうぐはん[△]に申けるは、けふのせんぢんをばさぶらひのうちに給り候へと申せば、はうぐはん[△]よしつねがなからんにこそ、まさなや、きみは大しやうぐんにてましますと申せば、かまくら殿こそ大しやうぐんよ、よしつねはぶぎやうをうけ給はつたれば、たゞをのくとおなじ事ぞとの給へば、かぢはらせんぢんをしようしかねて、天せいこのとはさぶらひのしうにはなりがたしとぞつぶやきける、はうぐはん[△]、そうじてなんぢはおこのものぞとの給へば、こはいかに、かまくらどの、ほかにしうもちたてまつらぬ物をと申、はうぐはん[△]、につくひやつかなとて、たちにてをかけたちあがらんとし給へば、かぢはらもたちにてをかけ、身づくろひするところに、みうらのすけ、どひの二郎むずとなかにへだりたてまつる、みうらのすけ、はうぐはん[△]に申けるは、大じを御めのまへにあてさせ給ふ人のかやうに

候はゞ、かたきにちからをそへさせ給ひなんず……とある(屋代本と略同文)。

目録には、

とをやのさた

源氏のふねのうちにしらはたくだる事

あはのみんぶ心がはり

はるのおおんやうじことはざの事

とある。

百五句、はやとも

せてい二の殿御さいご

おほいどのいけどらるる事

ひだの三郎ざへもんの事

のと殿さいご

しん中なごんとも、り御しよの御ふねにまいり給ひて、ねうばうたちに、見ぐるしきもの共みなうみにしづめ給へとの給へば、女ばうたち、此世の中はいかにと給ふ、しん中な言いとさはがぬていて、いくさはすでにかふ候よ、けふよりのちは、めぐらしきあづまおとこそ御らんぜんずらめとうちはらひ給へば、なんぢうたゞいまのたはぶれぞやとぞおめきささげ給ひける、二ゑどの、せてい[△]をい

だきたてまつり、をびにて二どころゆひつたてまつり……

とある。屋代本と少しく差がある。以後寛一本と大差がある。

のどのさいい
を見るに、

のとのぜんじのりつねは、やだねつき、いまはさいごとおもはれければ、あかぢのにしきのひたゝれに、ひおどしのよろひきて、源氏のふにのりうつり、しらのなきなたくきみじかにとつてなぎ給へば、つはものおほくほろびにけり、しん中なごん見給ひて、つかひにて、せんなきしはざかな、あまりにつみなつくり給ひそ、さればとてしかるべきものにもなしとのたまへば、さては此ことば大しやうぐんにくめとござんなれとて、その、ちは源氏のふねにのりうつりく、をしわけく九郎はうぐはんをたづね給ふ……

とある。屋代本と少しく差がある。

百六句、平家一もんおほちわたし

目録には、

いけどりのしゆみやこいり

うしかひ三郎丸の事

よりも二ゐにじよせらるゝ事

平大なごんのむこよしつねの事

同十六日、はうぐはん、おほいどのいげのいけどり

あひぐして、あかしのうらにぞつき給ふ、その夜は

月おもしろくして、あきのそらにもおとらず、女ば

うたち、つきせぬおもひのうちにも、おもひであり、

むかしはなのみき、しあかしの月をいま見る事のふ

しぎさよとて、うたをよみなんどしてなくさみあは

れけり、その中に、平大なごんのきたのかた、そつ

のすけ、こかをおもひいだし、

ながむればぬるゝたもとにやどりけり月よくもる

の物がたりせよ

となくくちずさみ給へば、はうぐはん、あづま

おとこなれども、ゆうにゑんなる心ちして、あはれ

にぞおもはれける

同廿五日ないしどころ、とば殿につかせ給ふ……

とある。屋代本と略同文である。寛一本と大差がある。

次に寛一本は、劍巻、一門大路渡、鏡巻、文沙汰と続く。

百二十句本の最も注目すべき所は、平大納言文の沙汰の

次に、

建礼門院の御出家(覚一本灌頂卷)がある事である。屋代本も同じ。

百七句、つるぎのまき上

百八句、つるぎのまき下

百九句、かゞみのさた

百十句、ふくしやう

と続く。

覚一本の劍卷とも異り、又屋代本の劍卷上下(別冊)

とも差あり、構成も差があつて成立の経過は複雑である。

劍卷下に、

けんきう四年五月廿八日の夜そがのきやうだいが夜

うちのとき、はこねのべつたうぎやうじつがてより、

ひやうごくさりのたちを五郎にえしは、此うすみど

りなり、さればなをとうだいにあげしとかや……

とある所は、屋代本にも、劍卷下に

建久四年五月廿八日ノ夜相模国ノ住人曾我十郎助成、

同五郎時宗親ノ敵公藤左衛門尉助経ヲ討レケル時、

五郎箱根ノ別当行実カ手ヨリ兵庫鎌ノ太刀ヲ得テケ

レバ思フサマニ親ノ敵討テケリ、此太刀ハ九郎判官

ノ権現ニ進セタリシ薄緑ト云劍ナリ、昔膝丸是也

……

とあるのと関係があらうか。曾我兄弟の事は注目すべき所である。

鏡卷は、覚一本の鏡卷とも異なり注目すべき文である。

屋代本なし。

かみよより三ツのかゞみあり、ないしどころと申た

てまつるは、その一ツなり、むかし天しう大じんあ

まのいはとをどちて……

とあり、鏡伝説をあげてゆく。次に、

百十句、ふくしやう

おほいどのふくしやうげんざんの事

おほいどのくはんとう下けう

ふくしやうきらるゝ事

めのとの女ばう身なぐる事

とあつて卷十一を終る。本文も覚一本と大差がある。

○平家卷第十二

百十一句、あほいどのさいご

注目すべきことは、巻の分割である。鎌倉本は、

宗盛清宗父子関東下向事

を巻頭とする。百二十句本同じ。佐々木本(天理図書

館現蔵)は、

大地震事

これは覚一本と同じである。屋代本は、

一宗盛清宗父子関東下向事

一同父子被誅被渡首事

一重衡被渡南都被誅事

一元暦二年七月九日大地震事

とある。鎌倉本に同じ。しかし本文は別に考究すべきであらう。

百二十句本の巻十二は、巻頭、

げんりやく二年五月七日のうのこく、九郎大夫はうぐはん、おほいどのふしぐしたてまつり、くはんとうへぞくだられける、はうぐはんなさけふかき人にて、みちのほどさまぐにいたはりなくさめたてまつりけり、おほいどの、あはれむねもりおやこがいのちを申なだめさせ給へかしの給へば、はうぐはん、こんどよしつねがくんこうのしやうには、ひたすら御ふたどころの御いのちを申なだめばやとこそぞんじ候へ、よもうしなひたてまつるまでの事は候はじ、いかさまにもおくのかたへなんどぞくだしまいらせ候はんずらんと申されければ……

とある。覚一本と大差がある。屋代本と略同文であり、

宗盛父子の浮島原にて、

しほぢよりのたえぬおもひをするがなるなはうきじまに身をばふじのね

われなれやおもひにもゆるふじのねのむなしきそらのけぶりばかりは

と詠んだ和歌がある。覚一本にある腰越の状などは百十四句とする。覚一本と大差がある。

百十二句、しげひらさいご

いづのくらんどの大夫よりかぬにおほせて、なんとへぞわたされける、みやこへはいれられず、山しなよりだいごへぞわたされける、三ゐの中じやう、しゆごのぶしにむかつての給ひけるは、われ一人のこなければ、此世におもひおく事もなきが、としごろあひなれたりし女ばうの、ひのといふところありとさく、うちすぐるやうにて、たちよりてたがひにすがたをいま一ど見もし見えもせばやと思ふはいかに、
此事が心にかゝりて、めいどもやすくゆくべしとも屋代本ナシ
おほえずとの給へば、しゆごのぶし、やすき御事に候とて、ひのにて大夫の三ゐのしゆくしよをたづねて……

とある。以後僅に差あれども屋代本と同文である。

百十三句、大ぢしん

同七月九日のむまのこくばかり、大ぢおびたゞしふうごひてや、ひさし、おそろしなんどもおろかなり、せきけんのうち、しらかはのほとり、六しうじ九でうのたうをはじめて、あるひはたふれ、あるひはやぶれくづる、ざいくしよく、くはうきよみんおく、まつたきはうもなし、あがるちりはけぶりのごとく、くづる、ちりはなるかみのごとし、天くらふして日のひかりも見えざりけり……(屋代本に類する)

とある。佐々木本は、平家巻第十二の巻頭に、大地震事とあつて、

平家亡テ後ハ、西国毛閑リヌ、国ハ遵国司庄ハ領家ノ儘也、上下安堵シテ思程ニ同七月九日ノ午剋許ニ大地鳴揺テ良久、赤県中白川辺、六勝寺九重ノ塔或倒伏、或崩破、在々所々ノ神社仏閣、皇居民屋全ハ無一字……

とあり、覚一本を伝へた文である。

百二十句本は覚一本と大差がある。注目すべきは、大地震の記事に続いて、

けんれいもんゐんはたまくとちやどらせ給ふよし

だの御ばうも、此大ぢしんにかたぶきやぶれて、いとすませ給ふべきたよりも見えず(中略)しのぎがたくぞおぼしめす

とある。これは屋代本と同文である。鎌倉本、佐々木本はなし、覚一本は灌頂巻の女院出家の後に[△]出る文である。次に、

百十四句、こしごえ、

九郎はうぐはんいよのかみになる事

同げんじあまたじゆりやうの事

かちはらざんそ

申しやう

とある。覚一本は、巻十一、副将切られの後、大臣最後の中にある記事である。

屋代本の巻十二には、大地震にて建礼門院の吉田の御坊の荒れはてた事の次に、

源氏五人受領

平氏生虜共流罪

がありて、平大納言時忠の流罪が続く。腰越の事がない。脱文か。

百十五句、ときたゞのとくだり、

よりとももんがくちうじやう

よしともぼだゐんこんりうの事

平家いけどりるざいの事

けんれいもんゐん大はらじやくくはうゐんいんきよとある。頼朝文覚面会には、覚一本の紺掻之沙汰に類する文がある。

こさまのかみ殿のくび、ねんらいごくもんにかゝり、ごせとぶらふ人もなかりしを、よしとものめしつかひけるかうかきのおとこ、ときの大りにあひ、さまざまに申うけ、ひやう衛のすけ殿の人にてましく、けれ共、すゑのたのもしき人なれば、よにいでたづねらるゝ事もこそあらんとて……

とある。他の八坂流甲類本にはない文である。時忠流罪は、覚一本に類する文であるが、覚一本にない文は、最後に、

日かずふれば、のとの国にぞつき給ふ、かのはい所はうらちかき所なりければ、つねはなみぢはるかにゑんけんして、なぐさみ給ひけるに、いはのうへにまつありけるが、ねあらはにして、なみにあらはれけるを見給ひて、大なごんかうぞの給ひける、しらなみのうちおどろかすいはのうへにねいらでまついくよへぬらん

かやうにゑいじあかしくらし給ひて、かのはい所に、大なごんつゐにはかなくなり給ひけるこそあらなれ

とある。鎌倉本、屋代本に同文。佐々木本は、歌の次は、常二ハ歌詠詩作、鄙ノ栖モ中々ニ都ニ替有様ヲヨスガト慰ミ給フとある。

けんれいもんゐん大はらじやくくはうゐんいんきよには、覚一本の灌頂卷の大原入と略同文であるが、文の順序が異なる所がある。屋代本と略同文であるが、屋代本には、

長時不断ノ御念仏懈事無テ送月日ヲ給ケリ清涼殿ニ花ヲ結シ朝風来テ

とあつて脱字がある。百二十句本は、

ちやうじふだんの御ねんぶつおこたらず、天ししやうれい、じやうどうしやうかく、一もんぼうこん、とんしやうぼだいといのり給ふ、中にもせんてい、二みどの、御おもかげ、いかならんよにかわすれたてまつるべきとおほし(めし月日)をくらせ給ひけり、せいりやうでんのはなをむすびしあした風きたつてにほひをさそひ、ちやうしうきうに月をゑいぜ

しゆふべ、くもをほふてひかりをかくすむかしは
……
とある。

百十六句、ほりかは夜うち

かまくら源二ぬ殿、とさしやうそんをめして、九郎
はさだめてむほんの心もあらんずらむ、せいどもの
つかぬさきにうたばやとおもふなり、大みやうせう
みやうどもをのほせば、うぢせたのはしをひき、天
がの大じにをよびなんず、わそうこせいにてのほり、
夜うちにも日うちにも、ぶつけいするやうにて、九
郎をたばかつてうちてまいらせよとの給へば、かし
こまつてうけ給り、やがてその日五十きばかりにて、
みやこへのぼる、けんりやく二年九月廿九日とさば
うみやこへのほりつきたれ共……

とある。覚一本と大差あり。以後は屋代本と略同文。

百十七句、よしつねみやこおち

覚一本と大差あり、屋代本と略同文である。

ぶんぢ二年のはるのころ、ひでひらをたのみて、あ
ふしうへおちゆかれけり、同十一月七日、ほうぢう
の四郎ときまさ、六まんよきにてみやこへいる、や
がてその日ぬんざんしてよしつねゆきいゑよしあき

らがむほんのよしそうもんす、たちまちちうりくす
べきのむね、ぬんぜんをくださる……

とある。屋代本と同文。次に頼朝、諸国に守護、地頭を
おき、段別に兵糧米を課する事、又大將軍となり惣地頭
となる(吉田大納言の事)事などがあり、次に十郎藏人行
家の最後がある。覚一本は長谷六代の次にあつて百二十
句本と順序が異なる。百二十句本は覚一本と大差あり。屋
代本と大略同文である。

百十八句、六だい

ほうぢう六だいいけどる事

みやこのしゆごにのぼられけるほうぢうがもとへ、
源二ぬ殿いひのほせられけるは、平家のしそんさだ
めておほかるらん、たづねいだし、うしなひ給へと
の給ひければ、平家のしそんたづねいだしたらん人
は、なに事ものぞみのま、なるべしとひらうしけれ
ば、京のものあんないはしりたり、たづねもとめけ
るこそうたてけれ(中略)、あれはかいしやくが申
事なりとて、うばひとり、おさなきをば水にいれ、
つちにうづみ、おとなしきをばくびをきる、……
とある。覚一本と大差がある。屋代本とは少し差がある
(屋代本を簡略化したかとも認められよう)。

ち、御ぜんとひとつところにもむまれよとの給へば、御ぜんにはわかれまいらするも、ち、御ぜんにはかならずどうしよにこそと、おとなしやかにぞの給ひける、こんねんは十二さい、見めかたちいつくしくたをやかに、なみだのす、みけるを、よはげ見せじとや、をさゆるそでのひまよりも、あまりてなみだぞこほれける

屋代本には、夜叉御前の事があつて、

六代御前今年十二成給フガ、余ノ人ノ十四五ヨリモ猶ヲトナシク貞姿嚴シク御坐ケリ、涙ノス、ミケルヲ、ヨソニ弱氣ミエジトヤ押ル袖ノ下ヨリゾコボレケル、サテ可有事ナラネバ、敵ノカ、セテ来ル輿ニ乗テゾ出テ給フ、斎藤五斎藤六御供シケリ……

とある。母御前の苦惱があるが、本書は、

は、やめのとは、むなしきあとにとゞまりて、いかにせんともだえ給ふとある。(以下省略する)

百十九句、おほはら御かう

覚一本と大差がある。

きしのやなぎつゆをふくみ、たまをつらぬくかとうたがひ、いけのうきぐさなみにたゞよふて、にしき

をさらすかとあやまたる、まつにかゝれるふちなみの、木ずゑの花ののこれるを、山ほとゝぎすのこゑも、けふのみゆきをまちがほなり、み山がくれのならひなれば、あをばにまじるをそざくら、はつはなよりもめづらしく、みづのおもにちりしきて、よせくるなみもしろたへなり、ほうわうこれをゑいらんあつて、かくぞおほしめしつゞけらる、

とある。屋代本は、

岸ノ柳露ヲ含玉ヲ貫クカト疑ハレ、池萍浪ニ漂テ錦ヲ曝スカト危^{アヤ}マタル、中島ノ松ニ懸レル藤浪梢ノ花ノ残レルニ、山郭公ノ一声モ今日ノ御幸ヲ待顔也、深山隠ノ習ナレハ、青葉ニ交ル遅桜初花ヨリモ珍シク、水ノ面テニ散シキテ寄来ル波モ白妙ナリ、庭ノ青草露重ク籬ニ倒懸リツ、外面ノ小田ニ水越テ鴨立隙モ無リケリ、女院ノ御庵室モ御覽ズレバ、垣ニハ萬槿ハヒ懸リ瓢箪屢空草顔測力巷滋シトモ覚へ……

とある。法皇の御歌のないことは注目すべきである。次の文も覚一本と大差あり、

いかにはなつみてまゐらすべきものもつきたてまつらぬにや、さこそよをのがれ給ふとも、いまさらならひなき御わざはいたはしくこそとおほせければ、

にこうなみだををさへて、事[△]あたらしき申事にては候へども、しやかによらいは、中天ちくのあるじ、じやうほん大わうのたいし、され共^かあびらじやうをいで、だんとくせんにいり、たかきみねにはつ[△]まぎをひろひ、ふかきたに、は水[△]をむすび、ゆきをはらひ、こほりをくだくのみならず、なんぎやうくぎやうのこうをつみ、つゐにしやうがくをなし給ふ、せんぜのしゆくしうをも、ごせのしゆくぐうをもさとらせ給ひて……

とある。屋代本と本文である。従つて百二十句本は屋代本をうけ継いだ文であると認むべきである。六道の沙汰、女院御死去など覚一本と大差あり、最後は、

百二十句、だんぜつ平家

へいじのかたうどちうせらるゝ事

よりともしきよ

もんがくみざい

六だいちうりく

をもつて終る。

そのころのしゆじやうと申は、ごとはのみの御事なり、御あそびをのみ御心にいれさせ給ひて、天がは一かうきやうの二ほんのま、なりければ、世のう

れひなげきもたえざりけり、たかをのもんがく、これを見たてまつり、よのあやうき事をかなしみて、二のみやは御がくもんもおこたり給はず、じやうりをさきとせさせ給へば、いかゞしてか二のみやをくらゐにつけたてまつらんとぞはかりける……

とあり、覚一本と大差あり、屋代本と略本文である。次に、屋代本には、文覚流罪の事があつて、

承久三年ノ夏ノ比、一院右京権大夫義時ヲ討ントシ給シ程ニ、軍ニ負サセ給テ処コソ多ケレ、隱岐国ヘシモ遷坐々ケルコソ淺猿ケレ(うつされけるぞあさましき、百二十句)六代御前ハ……

とある。百二十句本文である。百二十句本の卷七より卷十二までの六卷は、屋代本を基とした文である。屋代本の第九卷は欠であるが、百二十句本の卷九を以てや、補ひ得ると謂ふべきである。

以上で百二十句本の性格が明白になつたと思ふ。覚一本を基として、八坂流本の変化流動によつて、平家物語を語つた琵琶法師の語りの実体の研究が始つたといへようか。後人の研究を願つてこの研究を終る。

(佛敎大学名誉教授)